

存続を懸けた激動の時代へ

バブル期を挟んで景気の浮き沈みを繰り返したばんえい競馬。その先には、想像だにできなかった存続の危機が待ち構えていました。

売り上げ低迷の打開策として 場外馬券の発売がスタート

盛況を誇ったばんえい競馬にも不況の波はじわじわと押し寄せ、やがて厳しい冬の時代が訪れます。レジャーの多様化による競馬離れ、さらに岩見沢競馬場を襲った集中豪雨などの影響を受けて、昭和五十六年度の売り上げは、ばんえい史上、初めて低下。その後は、じりじりと下降線を辿っていました。

巻き返しを図るため、この時期に始まったのが場外馬券の発売でした。昭和五十九年には四市競馬場で相互場外馬券の発売を開始。レースが開催される競馬場まで足を運ばなくても勝馬投票券が買えるようになり、この年の場外発売総額は五十四億六〇〇万円、総発売額の二十三・六パーセントの実績を上げました。また、

同年には帯広と北見で薄暮競馬（イブニングレース）も開催されています。

キンタロー、初の1億円馬に 活気を取り戻すばんえい界

昭和六十一年八月二十四日、数々の重賞レースを制したキンタローが、岩見沢競馬場で初の賞金取得額一億円を達成。後に「ミスターばんえい」と呼ばれる金山明彦騎手が、通算一五〇〇勝を達成したのもこの年でした。この頃から始まったバブル景気に後押しされて、ばんえい界は再び活気を取り戻します。

市営ばんえい発足以来、競馬開催は四市それぞれが単独で行っていました。平成元年に北海道市営競馬組合を設立。開催業務を共同で行う新体制を整え、経営の合理化と経営基盤の安定

を図りました。その結果、三年連続して発売額を更新。平成三年度には、約三百二十二億円という過去最高の数字を叩き出し、入場者数も年間八十四万人、一日平均六千人を越えるまでにりました。

三市が撤退を表明 ばんえい存続の危機

その後、バブル崩壊後の先行き不安からか、平成七年に初の単年度赤字を計上して以来、売り上げは低迷。やがて、ばんえい始まって以来の一大危機を迎えることになりました。

平成十八年一月、三十一億円に膨れ上がった累積赤字を抱え、旭川、帯広、北見、岩見沢の四市長は「四市による運営は限界」と表明。運営の抜本的な見直しを図るため「ばんえい競馬改革検討プロジェクト」が設置され、議論が重ねられました。

同年十月、旭川と北見が同年度をもって開催から撤退することを決定。残る帯広と岩見沢との二市開催に望みが託されることになり

ました。しかし十一月二十七日、岩見沢も撤退を正式表明。二市開催に前向きだった砂川敏文帯広市長（当時）も「単独で開催することは困難」との考えを示し、ばんえい競馬の歴史に終止符が打たれることが決定的となりました。

ばんえいが廃止となれば、馬約七百頭、調教師、騎手、きゆう務員、合わせて約二五〇名が行き場を失い、ばん馬の生産者や馬主にも大きな打撃を与えることとなります。それは同時に、北海道の馬文化を今に伝える貴重な遺産が、あっけなく消えてしまうことも意味していました。

ばんえい競馬馬主協会、北海道ばんえい競馬調騎会はいち早く立ち上がり、市に請願書を提出するとともに寄附を申し出ます。ばんえいファンや市民有志も声を上げ、廃止反対の署名運動を開始。全国ファンから存続を訴える声が寄せられました。「半世紀以上の間、連綿と受け継がれてきたばんえい競馬を失くすわけにはいかない」。皆、思いはひとつでした。



史上初の1億円馬となったキンタロー。昭和54年にデビューし同61年に引退するまでに102戦32勝。農林水産大臣賞典（ばんえい記念）、岩見沢記念、旭シルバーカップなど数々の重賞レースを制した。



平成18年11月、ばんえい競馬の廃止を報じる記事に激震が走った。



平成18年11月末、ばんえい廃止の一報が報じられると、関係者や市民有志が、存続を訴えるキャンペーン、街頭署名運動などを活発に展開した。